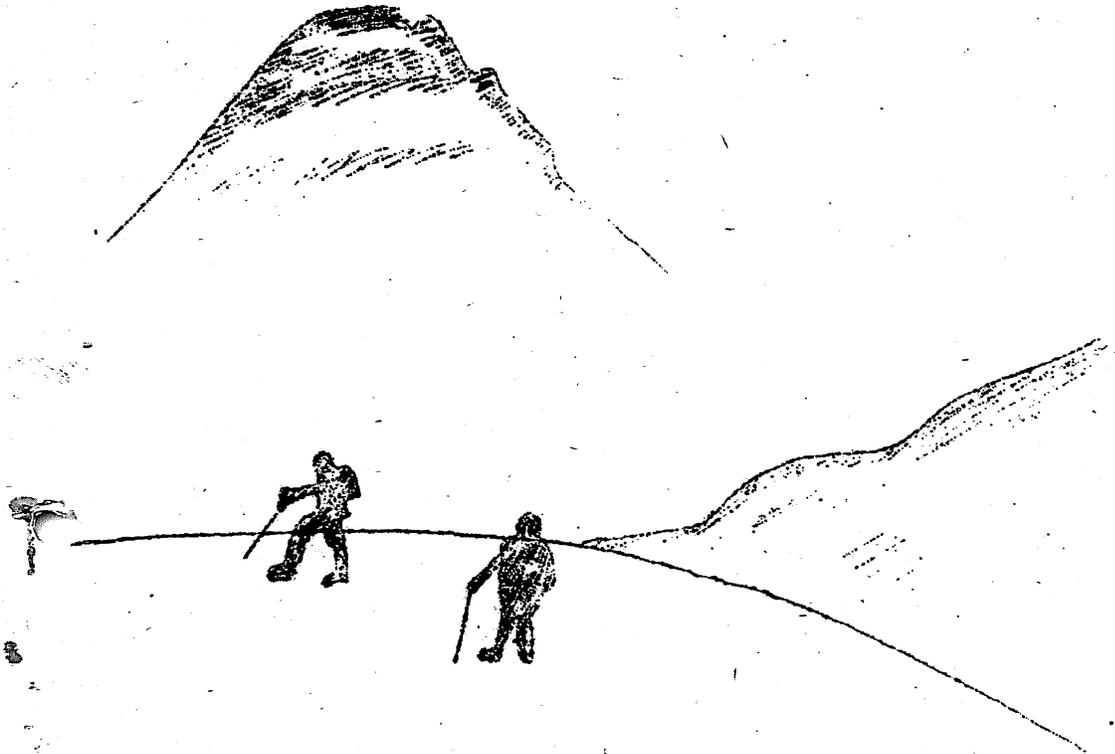


春山山行報告書

— 黒部川源流 Party —

S. 48. 3. 14 — S. 48. 3. 30



信州大学山学会

さんさんと降り注ぐ雪の陽光に 身体くまリシールをフケたスキーは重い
 顔はかりかりと焼け ストックを握る脚の腕はシマツを握り上げられ その素肌には雪の
 微風が心地よい そんな時は流れて眼を左に転じると瓦の瓦 青い有峰の湖の向うに
 今ではもう信じられぬ位の高さで距離と広がりを持って薬師から北へへの山脈が三日月の
 蒼空に光っている 使達は彼らの白い連判の中で過し 越えて来たのだ 入山して
 17日目 今日山を下る日 白い連判の世界で持たれ 半月余りの生活はやはり
 ひととりの感慨をなしてくれる ついに峠で薬師の山と空の広がり——
 あれば北の山のようか この空のようか 12月を告げると雪解けの又野和の部
 落へ 橋杖と林道の滑走が続いている----- (波部)

▶ S. 48.3.14 — S. 48.3.30

▶ 北アルプス中部横断 (黒部川源流)

信濃大町 — 高瀬入り — 湯根尾根 — 水高岳 鷲羽岳 — 重平 —
 黒部源流 — 薬師岳 東南尾根 — 薬師岳 — 太郎兵衛平 — 有峰 — 土

▶ C.L. 波部光則 (農3)

S.L. 加藤源豊彦 (工3)

大塚徹雄 (理4)

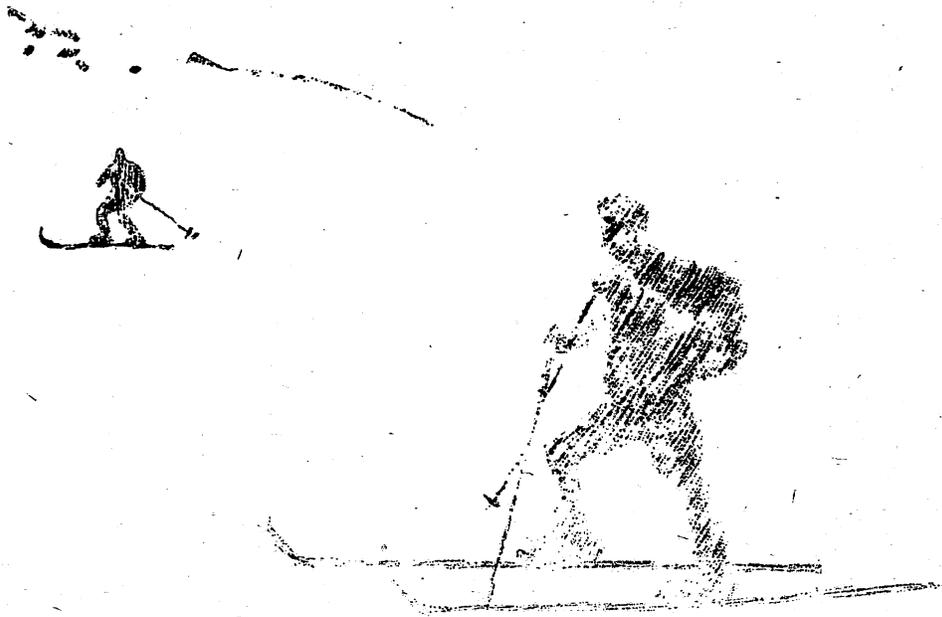
宇田茂 (人文3) Eisen

西川義満 (工2) Equip. Account

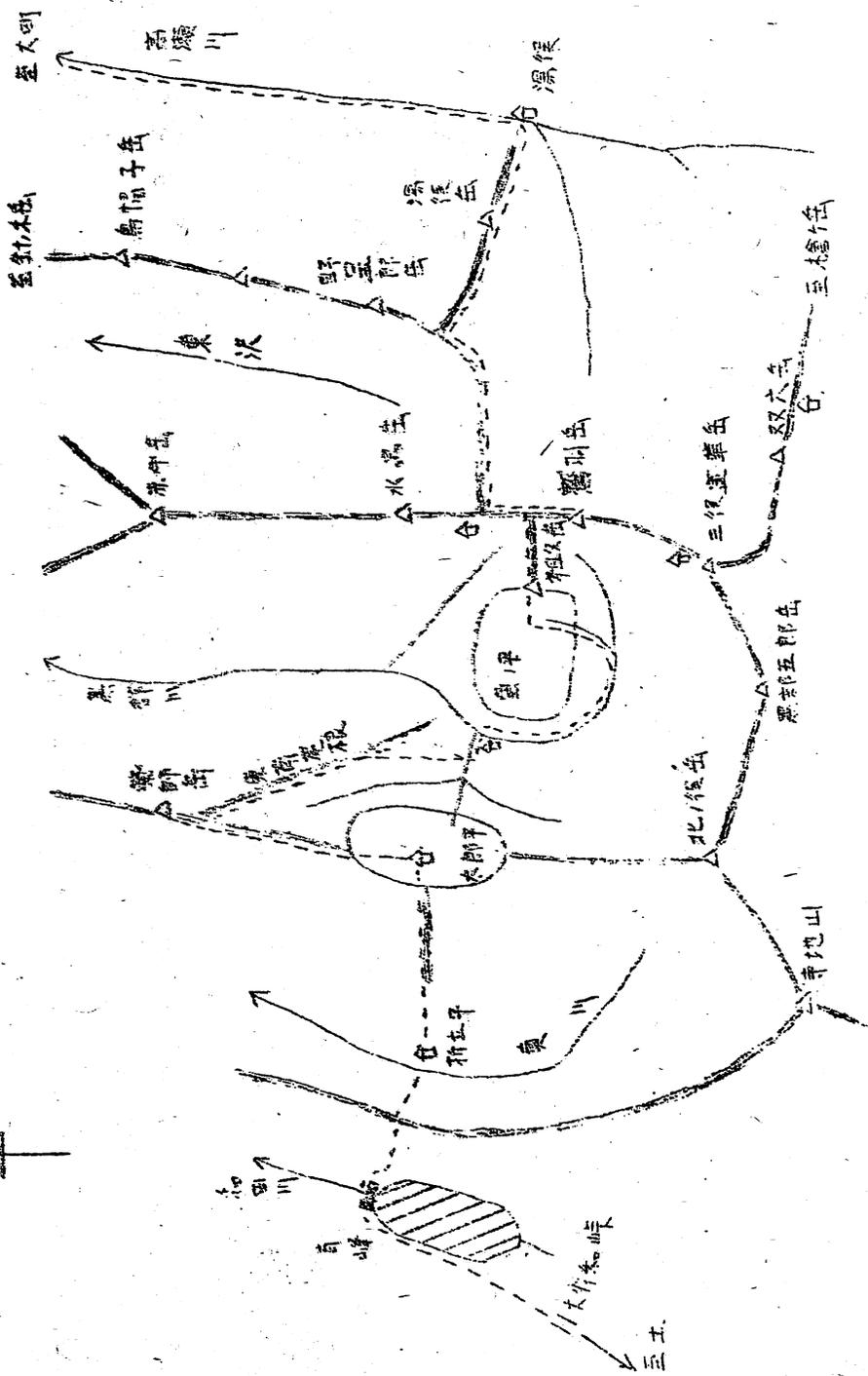
北岡政弘 (農1) Essen. Record

福島涉 (農1) - Essen Medical

吉川道格 (工1) Equip. Liaison



概况图



- C.L. 渡部光則

春山が終り大学が始まること今年も又十数名の新人が部室の戸をたたいて仲間入りする。毎年毎年同じことの——春が来たら春山に行く 繰り返しがもしないがそれでも各年の一年間の目的又要求される技術知識経験etc.の区切りとして春山は特別な位置付けが成されると思う。春なれば春山だ そんな各季節年の山に寄せて春や期待とは別のこととして
 各々この一年間蓄積された山の知識はこれから始まる新学年度の山への年生山立部では特に顕著な部員の数が一年増えたわけのことだがその自覚への踏み台としたい。今回の各人の反省をこれからの格闘として常に意識しておいてもらいたい

以下各人の反省文及反省金のまとめとリク—とした私の気持ちを書く。
 ○山行全体に関して

※多回の計画は、46年5月L.渡部 中田 小泉の当時2年部員で行—丸湯尾根～水晶岳東面縦攀のそれに涉郎し薬師岳に行こうとしていた天安 加賀瀬が加わり 昨年夏山の頃までには 略ぼ 黒部源流～薬師岳東南尾根の線は出来ていた。又昨年しそメンバーの決定が済まないまま 11月には 太郎小屋に10人×3日分のEsoletと燃料をデポして行った。そんなわけで計画の立案にあたってはほとんどコースそのものは3年部員以上で法の下級生の希望等相談するようなことがなされなかった。立案においては 湯尾尾根には上記の46年5月の経験と頼りにしすぎている(甘く見ていた)し、東南尾根にはその反対にジョック見すぎている(名大の記録を見ただけでモラウシ調べの方がよかった)。春山は冬山の下山後大学の後期試験他でいつもあわただしくとまずい冬山に死んで杜撰な出発になりがちなので心したい。今回の春山は水晶岳東面の登攀は試登すう出来なかったが一応の成功と見ている。新人指導に関してモ 略ぼ 満足出来た線であるう。

※スキーについて

扱っては今回の山域の特徴から考えて全愛スキーを持参した。これは滑る楽しみのためよりも、ワカンに代わるものとして 登高手段の一つと考えた。一応入山前に東踏岳で雪洞掘りの練習も兼ねて2泊3日でスキー訓練をした。上手な指導者に惹かれて初めてスキーを穿く番もいる扱のRuncy 有効な元と思う。何しろこのような本格的な長期入山の春山にスキーを使ったのは偉大では始末のことであつたが事故一つなく黒部源流 薬師岳東南尾根 有峰からの長い下山路と充分に役立った。予想以上の好結果であつた。今後スキーを積極的に利用する山行を希望することと思うので 特に記しておく。

I 結局 沢角したかき前皮付のカンダハ- (1名) アルペンツアー (トツア) (2名) シルベレーター (西征) (2名) の3種である。アルペンツアーは台天それも互右 ワンマーが切れた。ワイヤーが靴先で曲がる箇所金属部分の面トリが不良で切れるものと怒られる。アルペンツアーの場合もワイヤーが切断すると絆具全体を外さねば取り換えられず問題がある。シルベレーターはアルペンツアーの本意のキウなもので比較的軽量で故障も少ないと思う。高価である。カンダハ-は他の2種に比してケオとの上がりは少ない(他2種は16度まで)なので平地滑走の場合少し差があるかもしれないがそれが支障になるようなことはなく充分に登山用絆具の用を為す。それにカンダハ-以外の2種は全ての靴に万能ではない(ゴバの深い靴や幅の広く深い靴は無理である)。その点カンダハ-はどのキウな靴でも使えオーバーヒートも避けても使える利点がある。構造も簡単で故障も少なく修理も簡単。値段も安い。前皮付カンダハ-は信州には売っておらず東京まで取りに行った。

II Rurcy の人数が多くなると得てして先頭と後との間が大きく開くのでリーダー 先頭の者は気を配らねばならない。

III スキーの使い易い場所を求めあまり雪崩の恐れのあるところにも気易く入り込むことがある。只 反面に於て雪質化より注意深くすることも有る。今後とも積雪期の谷筋等にコースを求めるときは充分に注意を払って深い又谷だけだけでなく尾根に關しても急斜面を大人数で鋭くジブツケを切ったりして雪面のバタンスを崩さないよう注意しなければならぬ。

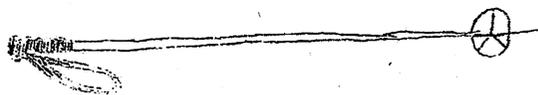
IV 山域の特性に合った場合なら登りに於て遙かにワカンキ)有効であり下り及横行の邪魔を補って有利あると思う。下りに關しても言いつけるには重荷を背負って斜滑降 山面を停止 クリスマニア キックダウンの三つが安定して出来るならば何とかなる。

V ジールは全頁ナロン製であった。アサラシのそれを知らないのでは行と云えないが略は満足出来る。ジールの取り付け方の上手下手は多少に問題となる。

VI スキーは山スキー用 (165cm位 中広くトツアバンドの反りのゆるく大きなもの) 普通のコンビネーション (170~185cmの各種) と個人所有のものであった。出来ることなら山スキー用のもので腰が強く長めの方がよいように思う (一般的に言って 180cmは谷欠い)。

VII 参考書として 成美堂版「山スキー」がよくまとまって役立つ。

北大の山岳部 O.B. が天啓で書いています。 巻 200円



☆ Essen 長編に就いて

I. Essen 屋敷が少なすぎた面がある。パン以外に副食物がもっと欲しい。

Essen 愛を安くするこゝとを優先しすぎた。

II 装備 石油用バーナーを使う場合必ずニールフル回しを待たす事。

又石油4Lカンを使う場合缶の中を洗い不純物が沈むような事は配る事

○Partyに就いて

リーダーシップに関しては資格未熟さと問題があると思うがよくリーダーを助けてくれて感謝している。メンバーシップも特記すべき問題点は少ない。良い状態であったと思う。

I 新人 上級生にも言えることだが体力不足が目立つ。自分勝手に行動は毎度言われる方に煩む事。少々のことで悪気消沈しないように。

アイゼンワーク 生活技術 略は満足いくものと思う。

以下二つのことはこれから山行に就いて考えておいて下さい。

(1) 応用能力を身に付けて下さい。装備に就いて Essen に就いて計画した教科書通りに行くとおぼつかない。下級生はよく上級生を注視し彼等がその時度 どの様に対処するかを思 考できないと成長しない。修理にしても装備の構造 特性をよく理解しておかないと役に立たない。又代用する知恵をその都度上級生から教わるように。

(2) 予裕を作るようにして下さい。この一つとして平凡に言えばいい意味で「要領よくやる」ということです。世間でいいことはやうんばいいし無駄なことはせん方がいい。何れも求め又要求される目的ルマをよりよくしようと努力、愛情をこめてやるか、かいつことは強次元のことです。こんなことは今更言うべき程のことではないと思つてです。只僕達の年代の昔、た山岳部には只管 皆が美って汗と油を流して長時間ゴチゴチしてればいい、おぼつかない流れがあったのを分る。それにこうして生み出される体力 時間 は予裕を作ってくれ予裕があるか、オー楽だし自分の持てる力を一杯に発揮して他のメンバーのことと、自分の各学年の立場を考へてることが出来るかです。新人諸君に就いてこうしたい人は事は今回の春山で私達の目についたけれども一朝一夕に新人諸君の身にたくもりではないのであってやはり数万人の山行を重ねる中で上級生のやる予裕や失敗をして成功をじっくり見て身に付けていって下さい。

II 2年部員以上 リーダーの未熟さを補ってくれ又4年1名3年3名

2年1名と問題ない構成だった。2年に関しては1名しかおらず大変なところと思う。体力不足と諸君の山の危険に注意を払うよう気を付けて欲しい。リーダーの少人数に就いては精神的な強さが欲しいと思つてます。

リーダーをやめる一途勉強になりました。自分の未熟さを知らずにリーダーとしてこのような結果となってしまったがこの長期の入山の春山でそんな自分を許してくれて感謝します。又今年部員の大変さんにはオソイリーダーの私に代りてそれでも私の思い通りに自由にリーダーシップを取らせてくれて又時々のアドバイス感謝します。

○入山日変更に関して

乗鞍でのスキー訓練で中田がキャンセルして出発を8日間遅らせられた。3年部員の中田が参加不能の際は山行そのものを変更する元めと会との話し合いも必要であるが今回は入山日の変更の連絡だけで済んだ。例のParcy に関してメンバーの変更があったが下山後の人会での話し合いでは上級生メンバーの不参加が起きた場合、一心その計画を白紙に返し、人会で再度検討する必要がある。又病氣他に関して病院及本人から山行可能かどうかよく問い直し無理をして入山することは厳に慎まねばならない。

以下の一文は「春山反省その他」のその他にある部分と認めて読んで下さい。

我々の部は未だ個人山行形式を重視し、部活動として個人山行中心の部活動の中に我々の今年度は入部して以来続けた来年度はやはりその流れは変わり新人指導もその中で行なわれて来ている。こういう個人山行形式は一年生自身の山行について多岐にわたるものだが、それと同時に今年度は技術的な知識、体力その他も蓋という女子も少しづつ出て来よう。もう一人合宿形式——いろんな解釈はとれ方が今個人山行中心の我々の部で考えている合宿、即ち訓練であって全員強制的参加の山行の山行年中行なって来て（その場合本書の山行はいつあるのぞう？こまめにでもみんなで行きますかね）蓋は出来るであろう。しかし現在のところ蓋ではなく表面的ではあるが話としてはならないある一定のレベルというものがより明確に意識されたいとすることは出来るのではないか。

私は個人山行形式こそ最も好ましい部運営の方法だと思っ
て来たが今年5、4年生5月山行及昨年の冬山今年度のうらやまが
出ているそれを感じる時やはり何かふさふさ感を感じるのです。昨年
冬山 穂の集いの言ひ出しは他ならぬ私でした。あの当時上記
分かる各学年の實力及同学年間の蓋というものを痛切に意識して
計画を出したのかどうか？全く疑問なあげです。冬山は他の同じ
うに全員参加の合宿（新人合宿、夏の若葉合宿、Pre冬山合宿）とは
比較して、その合宿の合宿、その山行、その山行、その山行、その山行

合宿」とは称せず「冬山部山行」であるといとも変なしかし満足すべき名
とつけたりした)場と年間方針を決めておきます。そういう山行の際、
全員参加であっても学上その山行の形式、山域を計画するのは部の一
握りの意識したとしておこなっている連中です。そして下級生の大半は
よくわからぬままにその作製された計画に、全員参加のゆえに組み入
れられ、その山に對して自分の行動が無理であるなんて全く意識しないま
ま合宿の一員となっておけです。もちろん Party で登るのだから上級生下
級生の持つ力の統合された力、平均化された力として山に對するのだが
(そのうち一人は考えて山行を計画するのだが)

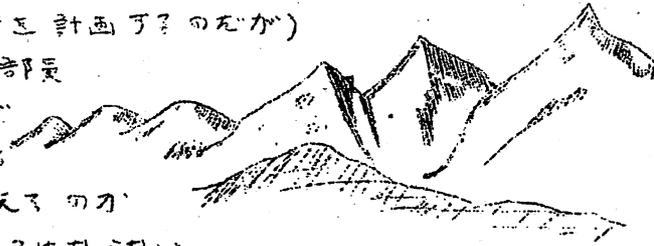
その際、はっきり言えて出来る部員

(これも変な言い方だが)

そうでない力が不足している

部員の安全性を完全に補えるのか

どうか。私は遭難を起してはならない



という御題目ともうに四つに組んだ「大学山岳部の中で、はっきり断言
出来ないのです。疑問に思うのです。このことは何も冬山合宿だけ
でなく、各季節毎の個人山行にも言えることだろう。立案し、仲間を伴
う時「御前は、この山はダメだ」とはっきり言えるのか(上級生同志の
山行は最初から下級生を案内たりはしないし、本人が下級生を伴
う山に登る)これも登山とか春山のような荒蕪の山行、下級生の
指導もその中で養成されるような山で言えるのか。私には自信がない。
何とかオーバー出来るだろうという線に強んじ、落着いて対応化してい
たのか。何だかんだと言って、時々のんびりとした山に登っている冬や春
の山は、かなり昔から、日本の山の第一級のカリカリしたジョッパ、丸に取
付いたります。そういう中でカリカリした丸に行きたくない者も組み入れ
連れて行っているのではないかと、全員参加だとか新人指導を受けたのだ
という必要から、個人山行形式の山岳部がカリカリした丸へ行く者も
カリカリ丸へ行く者も共に部に居て仲間となっていくわけだ。

そんな時、全員参加の冬山で、個人山行の中でカリカリした丸へ本当に
部として行かなくてはならないのか。カリカリした丸へ行くことが、大学
山岳部特有の一年間 cycle の中で、一生懸命そこに行けるように努力
し精進しないといけないのではないのか。ある程度今まで言っているこ
とは極論かもしれない。我々の山岳部は、マンネリ化の一辺倒、カリカリした
丸へ行くのが目的ではないし、バリエーションということも押し出しては
おられない。個人の自主性を尊重し、自分の意志で好きな山登りとし
ようとする集りだ。そのような考えでやってきている部に、最低線を持つ
は、ないレベルとか、一部の精鋭、地方の志向する山に組み入れられ

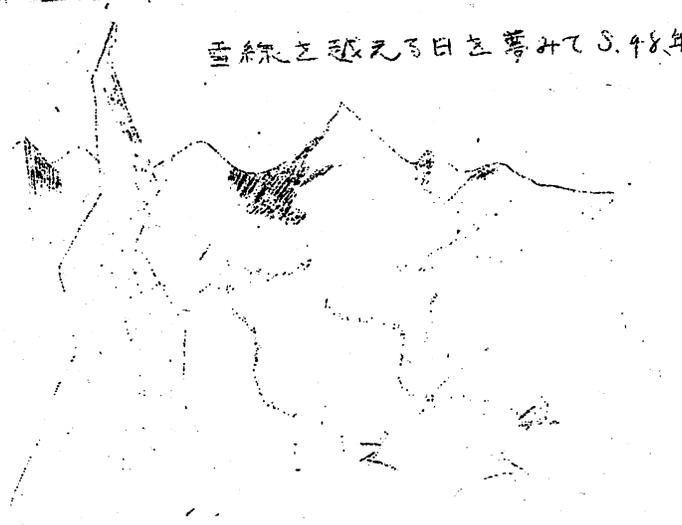
「山、おたけの念山は...」と書いておられる
只で安全事故を起こしてはならないという一筋のこの考えを起こ
たのですか 絶大な文に成りました。

とまれ 私がこの様なことを書いたのは下級生の中で行なうかと
校又上級生の間の討議で問題点が出される人は自分の安全性元と
かこの様なことを恐らく意識しないままに山に入っているのでは
ないのですか。自分自身の安全身を守るということを痛切に意識す
べきではないですか。山で事故を起こすのはリーダーであれメンバー
であれその本人でしかないと思うのです。又その事故の背後に部
というものがあると考えるならそのような部で山登りの指導を行な
っているのです。「自分自身が他じゃあないこの俺が事故を起こすか
もしれない」ということをはっきりと自覚すべきではないですか。

山行を計画し部活動を運営していく上級生はよくこのことを意
識していかねばならぬのではないだろうか。

今年度4月から自分勝手な理由のためのリーダー会にも入らずに新人
合宿はあつた部会にも満足に出ず8月から半年あまり日本を離
れようとする私は、部のみ人々に何等具体的な行動を取れず
目えてばかりなので、どうしてもこれ手て書いてきましたここにけ
は意におきたか、あつたから、後おきたこと、意に書きたる部
会のないこと、おたけに思いをしたら、香山、及、おたけの序でに部会
で述べさせてもらいました。もと整理して書かねばならなかつたので
す。香山の報き纏の期日もあつて、そのままこの論文で、了
元録係の人には余分な仕事を増やしてしまつてすみなく思います。
どうかこの一文から意を御察し下さるよう、そしてさしあつての冬
山よく御検討下さるよう御願ひします。
諸元の御意見聞かせてもらいたいです。

雪線と越える日を夢みて S.48年7月5日記入



行動記録

3月14日

6.10 湯沢駅 → 7.40 高瀬館 ⊙ → 10.45 オ5 発電所 ⊙ → 16.40 湯沢小屋 ⊙
→ 11.15 オ5 発電所 ⊙ → 17.30 湯沢小屋 ⊙

7:19 以上の連絡悪く出整 2 時間程遅れる

6.10 マイクにて無線発 7.40 高瀬館着 これより先は 9 人工事
のため車通行不可能 2 Party に分かれ深き道に湯沢へと向かう
先登隊 L. 渡部 大友 西川 吉川

7.45 高瀬館前出発 10.45 オ5 発電所 これよりスキーニ着装
し主に河原と行く 積度も流れに阻まれスキーの着脱に手間取す
16.40 湯沢小屋着

後登隊 L. 加賀源 中田 福島 北岡

7.45 高瀬館前出発 11.15 オ5 発電所 以上の積もりに他
をテホしスキーニ着装し先登隊の後を追う 11.45 オ5 発電所着
17.30 湯沢小屋着

3月15日

6.30 湯沢小屋 ⊙ → 14.30 2200m P. T.S. ⊙

6.00 湯沢小屋 ⊙ → 8.00 オ5 発電所 ⊙ → 10.50 湯沢小屋 ⊙ 12.00 →

15.00 1900m 地着 ⊙ 15.40 → 17.00 2200m P. T.S. ⊙

先日の Party のままルート工作屋から回収へと向かう

ルート工作隊 L. 渡部 大友 西川 吉川

6.30 湯沢小屋発 小屋からすぐ 20m 程の急峻な登り 約 1 時間ニ
要す 後は主に尾根沿いに重い雪との苦闘 14.30 湯沢小屋前
2200m Peak T.S. 設営後 テホ隊と出向先に行くと行く

テホ回収隊 L. 加賀源 中田 福島 北岡

おがんにストックを携えオ5 発電所へと向かう

6.00 湯沢小屋発 8.00 オ5 発電所 10.50 湯沢小屋着 往復
天おがんに用いずに済んだ

スキー 4 台 積もりに 3 個 他に小屋にテホし先登隊の後を追って湯沢
尾根に取付く 12.00 湯沢小屋発 15.00 1900m 地着 17.00
先登隊の出向先を受け 15.40 発 17.00 T.S. 着

3月16日

6.40 T.S. ⊙ → 7.50 湯沢小屋 ⊙ → 11.05 南奥砂岳手前のコル ⊙ → 12.10 T.S. ⊙

6.30 T.S. ⊙ → 8.30 湯沢小屋 ⊙ 9.00 → 12.05 T.S. ⊙

14.00 T.S. ① — 15.15 T.S. ②

ルート工作队 L 加賀 瀬 中田 西川 福島

6.40 T.S. 発 7.50 湯浅岳 湯浅岳先のコルに雪泥が所々見られる
また最厚雪崩の起こりそうな斜面 40m 程 fix を行なう

11.05 南黄砂岳手前のコルにテポ 13.10 T.S. 着 既に帰天していた
テポ回収隊と共に次の T.S. へと向う 14.00 T.S. 発 15.15 T.S. 着
湯浅岳を少し超えた林の中のコルを天場とする

テポ回収隊 L 渡部 又安 吉川 北岡

6.30 T.S. 発 先日の天れそうであつた谷のトラバース (1850m 付近) を
避け他のルートをとつたところ屋根をすり時間区とされる。

8.30 湯浅小屋着 9.00 発 12.05 T.S. 帰天 以後の行動はルート
工作队ル内じ

3月17日

7.00 T.S. ③ — 真砂岳④ 11.40 — 14.20 水晶屑の小屋⑤

7.00 T.S. 発 あがんにアイスで水晶の屑へと向う 途中南黄砂岳下にて
スキー他一部テポを追加する

南黄砂岳前よりからアレーカフルワラストした雪面をアイスで進む
真砂岳手前のカレを岩場 fix して通過 真砂岳をトラバースして
寛銀産主線線へと出る

11.40 寛銀産主線線出合 天気よく途中日陰にこぼれをしながら
水晶の屑への最後のよりとなる ぶりにつれ雪となり一歩した風雪の
中を水晶屑の小屋につく

14.20 水晶屑の小屋 入口の雪を掻き出した倉のような小屋に入る

3月18日

終日地吹雪 かす 沈

ラジオスのノズルがフネリ 調子悪く分解掃除を行なう
石油カンのゴミが原因らしい

3月19日

地吹雪 かす

屋前よりかすが晴れたので水晶屑 attack に向うが雪の状態悪く岩峰
超えられず 大きな風が吹く強風 1時間程で引き返す
一年先を考えた場合は fix を必要とする処である

3月20日

6.20 水晶屑の小屋⑤ — 8.20 テポ地⑥ — 11.20 小屋⑦

12.15 小屋⑦ — 13.50 水晶屑⑧ 13.40 — 14.30 小屋⑨

6.20 肩の小屋発 強風の中と曇りでテボ回収し行方

8.20 テボ回収 11.20 小屋着 予定より風強く行人等は顔に程度の凍傷を負う

水晶のL&C隊 L.大安 加賀瀬 中田 西川

12.15 肩の小屋発 13.30 水晶R&C着 13.40 発 14.30 肩の小屋着

A1 Junctionの次のR&Cよりアンテナを立てる(大安-加賀瀬 中田-西川)

2F スカウト 後コンテで快晴のR&Cに立つ

3月21日

風雪 沈

3月22日

6.30 肩の小屋〇—7.10 岩吾乗越〇—8.10 鷲羽岳〇—8.40 岩吾乗越〇—10.30 祖父沢源頭〇—13.50 祖父平T.S.〇

6.30 肩の小屋発 6.00 出発が遅れ 6.30 小屋を出る 風が強く地吹雪であるが空は快晴 岩吾乗越にサクッとテボしサクッと鷲羽岳へと行方 7.10 岩吾乗越 8.40 鷲羽岳 8.40 岩吾乗越

乗越よりアイゼンで祖父岳を越え祖父沢の源頭に立つ

このころから風は弱まり番山特有の青空と雪の雲の平となる

スキー着陸 斜滑降 急峻な滑りにて祖父沢を下る

10.30 下降開始 13.50 祖父平T.S.

祖父沢を下部にたると谷相も狭くなり所々に円形のクレバスを認めるようになるが 前に黒部五郎のくさりした skyline を迎撃見ながらの快適な滑降であった

3月23日

6.50 T.S.①—9.20 兒平②—11.50 栗軒沢出合③

曇りかき曇り見える青空を思ふに黒部の谷をスキーで降りる

沢沿いの快適な下降が続く 赤沢沢に近づくにつれ川巾が狭まり

トコが出てくる 標高の高いスキーで水溜りを見ながら進む - 2度3度

スキーを脱ぎ フットで斜面を整へて降りたりする

赤沢沢河口が狭まるにつれ霧がきかす川を下る そのまま左岸右岸を数度渡り

11.50 栗軒沢の小屋前に立つ 雪の感はない 雪の降り始めが

重なり掛かっている 北大山岳部の2人と出会う 我々とはほぼ同じコースを

たどり来たとのこと 天気が悪そうなので小屋に入る

3月24日

雪 沈

3月25日

雪 沈

一度スキーを一回小屋を出発したが小雪がちらつきはじめのピッチも上がらず
1時間で引き返す

3月26日

7.00 小屋明 — 8.30 東南稜取付き①② — 10.15 2500m地点③ — 2.55 T.S.④

8.00 薬師派出寄の小屋発 小雪のちらつき中エワカンにて小屋の上の急斜面
を上る 20分程で急斜面は終り スキール変える

30分程進んだところでカヤクが原より薬師沢へと下りる

沢を30分程進んだところ、三便の手前より薬師東南稜へと取付く

シェルがよくなり ジグザグをくり返し快調に高度が上がる

8.30 東南稜取付き 10.15 2500m地点

2500mにもなると雪面も急かつ堅くなり スキーよりアイロンへと付け替える

11.00 頃 東南稜主稜線北づく 雪底が登達している

2670m 山頂より横線伝いに行く

2.55 T.S. 地味雪とか又濃く右手の雪底全く判別出来ず 行動不能と

なる 避難小屋のすぐ下のゴル(これは翌日判、丸骨である)を足場とする

相変らず風は強い 内張りなしのテントの中はすこぶる寒く -16°Cを示す

3月27日

7.10 T.S.① — 7.15 薬師主稜線② 7.55 — 9.40 太郎小屋③

7.10 T.S.発 強風の中エ薬師へと向う 7.15 主稜線 サカレて

Peakをヒストンする 7.55 太郎へ向う 風は相変らず強い

途中ホリスターを付け風の弱まる中エ快適なシェル登行を行なう

途中東京電工大 Party と出会う

9.40 太郎小屋 午後は靑空の下 スキーの練習をする

テントは乾いて寒事 夜 V.S.O. で酒宴を上げる

3月28日

終日 ミソシ 強風 沈

昨日の天気予報では晴れ？はずであつたがミソシが強い南風を
伴って降っている。

下山を目前に北側 albuca までやや早く下山し降り止むものと
覚くこと

夜 ラジオでは例年より1ヶ月遅れの春一番を報じている

3月27日

無く雨量の立ち上り山の上は近づく感じ異様な霧気の中をスキーして下山

6.20 太郎小屋着 10.00 折立平着 10.30—13.00 有峰尾根資料館

6.20 太郎小屋発 昨日の雨で表面はクラストし非常に滑りにくい

1Pも行ったころから雨が降り出す 下部の樹林帯へ入りスキーからおかしに換える

10.00 折立平着 10.30 発 これより再びスキーを穿き雨の林道を行く 折立道は出口を雪崩でふさかれ、小さな横穴を伝って出る

13.00 有峰尾根資料館着 高床式資料館の床下を天塚とする

3月30日

6.20 T.S. O—8.20 有峰湖ダムサイト O—12.35 大99和峠 O 13.00—

15.25 大99和部落 O—16.25 佐古部落—猪谷

天気図は菜種梅雨の様相を呈しているにもかかわらず快晴の上気にならされる

6.20 T.S. 発 スキーして林道を進む 7.20 有峰湖ダムサイト

9.30 大99和峠の上りにかかる 春の腐った雪にスキーが重い

途中ビンディングのワイヤーが切れ(福島 北岡) 応急修理を行なう

12.35 大99和峠着 13.00 発 これより約2時間 林道の快速な滑降となる 15.25 大99和部落 雪掻きほしてあるものの人は

誰も思わない これよりスキーをかつぐ

16.25 佐古部落 もう一泊を覚悟していたところ運よく山林事務者の方の車に便乗させていたかく 一路 猪谷 駅へ

当日は雪山 駅止り 同夜、当駅にて解散

文責 記録係 北岡



Ich weiss nicht, was soll es bedeuten,
dass ich so traurig bin
Die Luft ist kühl und es dunkelt,
und ruhig fließt der Kurobe
der Gipfel des Berges funkelt im Abendsonnenschein.

Heinrich Heine Lorelei 51 一部改訂

1973年8月17日印刷

限定 150部

信州大学山学会